

与論島をどう活性化したらよいか？

教育学部保健体育専修

1年 宇都 嘉朗

与論島を活性化させるにあたってまず一番にすることは交通手段の拡大である。今現在与論島にたどり着く交通手段としては沖縄か鹿児島本土からの飛行機または鹿児島本土か神戸・大阪からのフェリーとなる。これでは海外からの観光客はもちろん日本国内からの観光客も与論島に行くために多くの時間とコストがかかる。与論島は大きな島ではなく空港の滑走路もそんなに広く面積をとることは難しいかもしれない、しかしせめて東京から直通の飛行機をつなぐことでより与論島が身近なものになるかもしれない。このように交通の手段を拡大することで観光面の活性化を図ることができる。

次にすべきことは宣伝である。自分は高校まで東京にすんでいたのだが東京で与論島という文字をみたことは一度もない、もちろん探せばあるのかもしれないが、そんな僕が与論島を知ったのは中学生の頃祖母のいる鹿児島に遊びに来た際に鹿児島空港でみた百合が浜の写真だ。それ以来一度訪れてみたいと思っていた。与論島にはそれだけの魅力があるのに知名度が高いとはいえない、戦後間もなくは日本最南端の島ということもあり観光客も多かったかもしれないが沖縄が返還された今、その称号はなく若い世代に認知されなくなってきている。与論島のあの海の存在を知ってもらうことで多くの人を呼び込めるはずだ。日本にも海がきれいな場所はいくつもあるが、島を周り続けた有名人が TV で与論の海はすばらしいと言っていたのだからもっと PR するべきだ。加えて百合が浜の存在ももっとしってもらうべきだ。きれいなあの浜を求めて、ただの家族旅行だけでなく暇な大学生や新婚夫婦といった人々の来島が期待できる。

今まで観光面だけを考えてきたので別の分野に目を向けると、情報・通信面の向上はとてすばらしい試みだと思った。与論島を訪れた際に予想以上に電波がよかったのには驚いた、宿舎にも wi-fi が設置してありとても通信面の設備は充実していた。その通信面の向上に伴い、住民サービスの向上・修学旅行や合宿の誘致がさらに進められるようになってきていることはすばらしいことだ。故に良いところはもっと伸ばすべきだ。他に良いところといえば企業の誘致もすばらしい活動だ。狭い離島のなかでは就ける職業というものは限られてくる、

そういった状況の中で他の土地からの企業を与論島に呼び寄せ、雇用の拡大を図る活動は島に残る島民を増加させるだけでなく、島外からの新たな住民の確保にまでつながる活動だ。この活動を拡大することによって与論長の目指す“持続可能な町づくり”を可能にするものと思われる。

次に漁業面の話に移ろうと思う。与論島は大変台風の影響を受けやすい、大きな台風が島に上陸すれば島の農作物は絶大な被害を受け漁業も台風がくれば漁に出ることはできなくなってしまう。農作物は一度大きな被害にあって再起不能となればその年の歳入に大きく影響する。現に平成20年度の生産量は平成23年度に比べて約5倍、売上高は約2分の1程度となる。このように安定感がない、漁業も多少環境の影響はもちろん受けるが農業に比べると安定している。そこでこの漁業をどのように伸ばしたら良いかを考える。与論島の漁業の問題はたとえば水揚げ量が良くてもそれを島の外で流通させるのが難しいということだろう、たしかに島の付近でとった魚などをわざわざ本土までもって行ってそこで市に出すのにはコストがかかりすぎる。船の燃料代、魚等を保存する機器代。それを毎回していたら大した利益にはならない、もしかしたら逆に赤字になってしまう可能性もある。しかし、漁を島付近で行うのではなくとった魚等を島に持ってかえるのではなくそのまま本土にそのまま持っていける場所で長期にわたって行うことができれば水揚げ量も増えより多くの利益を生み出せる、と思ったがそのためには長期漁を可能にする新しい船の購入でコストがかかるうえに必ずしも大漁とはかぎらない、しかしどうにか島から出したい、そこで近くの沖縄ならば本島にくらべて簡単に進出できるとかんがえる。

最後になるが、与論島を活性化させるのに一番大切なことはまず与論島という存在をより多くの人に知ってもらうことである。滑稽かもしれないが東京の渋谷の駅に百合が浜の大きなポスターを貼るだけで来島者は自然とふえると考える。